

ごんぎつね

新美

南吉

—

これは、わたしが小さい時に、村の茂平もへいというおじいさんから聞いたお話です。昔は、わたしたちの村の近くの、中山なかやまという所に小さなおしろがあって、中山様というおとの様がおられたそうです。

その中山から少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というぎつねがいました。ごんは、一人ぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中に、あなをほってすんでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種なたねがらのほしてあるのへ火をつけたり、ひやくしょう家のうち手につるしてあるとんがらしをむしり取っていたり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られな

くて、あなの中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして、あなからはい出ました。空はからっと晴れていて、もずの音が、キンキンひびいていました。

ごんは、村の小川のつつみまで出てきました。辺りのすすきのほには、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水がどっとまっていました。ただの時は水につかることのない、川べりのすすきや、はぎのかぶが、黄色くにごった水に横たおしになって、もまれていきます。ごんは、川下かわしたの方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうつと、草の深い所へ歩きよって、そこからじつとぞいてみました。

「兵十へいじゅうだな。」

と、ごんは思いました。兵十は、ぼろぼろの黒い着物をまくし上げて、「ごしのごし」まで水にひたりながら、魚を取るはりきりというあみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちよつに、丸いはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいに入ぱりついています。

しばらくすると、兵十は、はりきりあみのいしばん後ろの、ぶくろのようになつた

と思いました。

「何だろっ、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが。」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十のうちの前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大ぜいの人が集まっていました。よそ行きの着物を着て、こしに手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえています。

「ああ、そう式だ。」

と、ごんは思いました。

「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六じぞうさんのかけにかくれていました。いいお天気で、遠く向こうには、おしろの屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いています。と、村の方から、カーン、カーンと、かねが鳴ってきました。そう式の出る合図です。

やがて、白い着物を着たそう列の者たちがやって来るのが、ちらちら見え始めま

した。話し声も近くなりました。そう列は、墓地へ入ってきました。人々が通った後には、ひがん花がふみ折られていました。

ごんは、のび上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、いはいをささげています。いつもは赤いさつまいもみたいなの、元気のいい顔が、今日は、なんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつかあだ。」

ごんは、そう思いながら、頭を引っこめました。

そのばん、ごんは、あなの中で考えました。

「兵十のおつかあは、とこにっついていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから兵十は、おつかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おつかあは死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いつながら死んだんだろう。ちょっと、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

おつかあ……お母さん。

兵十が、赤い井戸の所で、妻をといでいました。

兵十は、今まで、おっかあと二人きりで、ますしいくらしをしていたもので、おっかあが死んでしまつては、もう、一人ぼっちでした。

「おれと同じ、一人ぼっちの兵十か。」

「こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。」

ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだあい。生きのいい、いわしだあい。」

ごんは、そのいせいのいい声する方へ走っていきました。と、弥助のおかみさんが、うしろ口から、

「いわしをおくれ。」

と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、びかびか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけ出

しました。そして、兵十のうすのうしろ口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ向かってかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返つてみますと、兵十がまだ、井戸の所で妻をといでいるのが、小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないだ、ます、う、う、いいことをしたと思いました。

次の日には、ごんは、山へへりりをとさり拾つて、それをかかえて、兵十のうちへいきました。うしろ口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食へかけて、ちゃわんを持つたまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには、兵十のほつぺたに、かすりきずがついています。どうしたんだらうと、ごんは思っていますと、兵十が、ひとり言を言いました。

「いったい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへほつりこんでいったんだらう。おかげでおれは、ぬすびとと思われて、いわし屋のやつだ、ひどい目にあわされた。」

うそ、

「いわしはじまつた。」

と思ひました。

「かわいそうに、兵十は、いわし屋にぶたなべをらわれて、あんなきずまでつけられた

のか。「
ごんは、こつ思いなながら、そつと物置の方へ回つて、その入り口に、くりを置いて
帰りました。

次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾つては、兵十のうちへ持つてきてやり
ました。その次の日には、くりばかりでなく、松たけも二、三本持つていきました。

四

月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のおしろの
下を通つて、少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こ
えます。チンチロリン、チンチロリンと、松虫が鳴いています。

ごんは、道のかた側にかくれて、じつとしていました。話し声は、だんだん近く
なりました。それは、兵十と、加助かすけというおひゃくしょうでした。

「ああん？」
と、兵十がいました。

「ああん？」

「おれあ、このころ、とても不思議な事があるんだ。」

「何が？」

「おつかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに、くりや松たけなんかを、
毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、だれが？」

「それが分からんのだよ。おれの知らんうちに置いていくんだ。」

ごんは、二人の後をつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも、うそと思つたら、あした見に来いよ。そのくりを見せてやるよ。」

「へえ、変な事もあるもんだなあ。」

それなり、二人は、だまつて歩いていきました。

加助が、ひよいと、後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなって立ち止
まりました。加助は、ごんに気がつかないで、そのままさつさと歩きました。
吉兵衛きちべいというおひゃくしょうのうちまで来ると、二人は、そこへ入っていきました。
ボンボンボンと、木魚もこぎの音がしています。まどのしょうじに明かりがさしてい
て、大きなぼうず頭がうつつて、動いていました。ごんは

「おねんぶつがあるんだな。」
 と思いつながら、井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人が連れ立って、吉兵衛のうちへ入っていきました。おきょうを読む声が聞こえてきました。

五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十のかけほうしをふみふみ、行きました。

おしろの前まで来た時、加助が言いだしました。

「おきょうの話は、きくと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」

「えっ。」

と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ。神様が、お前がたった一人になったのを、あわれに思わっしやって、いろんな物を

めくんでくたさるんだよ。」

「そっかなあ。」

「そうだとも。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

「うん。」

「へえ、こいつはつまらないな。」
 と思いました。

「おれが、くりや松だけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言っつんじやあ、おれは、引き合わないなあ。」

六

その明くる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置で、なわをなっていました。それで、ごんは、うちのつら口から、こっそり中へ入りました。

その時、兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ入ったではありません

ませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがった、あのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。

「うん。」

兵十は、立ち上がって、なやにかけてある火なわじゅうを取って、火薬かやくをつめました。そして、足音をしのばせて近よって、今、戸口を出ようとするごんを、ドンとうちました。ごんは、はたりとたおれました。兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりがかためて置いてあるのが、目につきました。

「お。」

と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。

「ごん、お前だったのか。いつもくりをくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火なわじゅうを、はたりと取り落しました。青いけむりが、まだ、つつ

口から細く出ていました。